

## 瀧 清氏・長崎原爆に関する口述記録

日時：2009年10月2日(金)13:30-16:30

場所：生理学研究所(山手地区)

話し手：瀧 清 (元自然科学研究機構・生理学研究所長)

聞き手：安藤正人 (学習院大学)

加藤聖文 (国文学研究資料館)

清水韶光 (総合研究大学院大学)

**質問者** 総研大の廣田先生の会で先生がお話しになりましたあとに、簡単にご説明申し上げましたが、原爆資料のアーカイブをちゃんとすべきではないかということを考えておりました。その流れの1つとして、ABC Cに関係していたアメリカの研究者、シャル博士とか、そういう人達のインタビューは始めていたのですが、先生のお話を伺って、日本にもいらっしゃるんだということで、実は先生のお話がきっかけで、こういうオーラルヒストリーを始めました。

原爆の被害にあわれた方々の聞き取りなどは膨大にあって、例えば一橋大の先生も、今まとめているようですし、いろいろな人がまとめています。私が目をつけたのは、いわば専門家の方々、お医者さんとか…。専門家の方々に、本当に現場を見た方々の話は、一般の方とはまたちょっと違うのではないかと。そういうところを伺いたいという趣旨で先生にお願いした次第です。

**瀧** わかりました。私は専門家じゃないですよ。実はね、あのころまだ3年になったばかりの学生だったのです。

**質問者** ええ。それでも医学部の学生だったということはね、随分その場で治療などに携わっているんじゃないですか。それはやはり普通の人とは違うだろうということが、1つみそだと私は思っているのですけど。

**瀧** 私の方のステータスを申しますとね、ここに書いてきましたけど…。襤褸という言葉をお聞きでしょうか。

**質問者** ぼろ？

**瀧** これね、原子爆弾の一番初めのころを見た方はね、当日、襤褸の流れという言葉を使っているんです。これは、ひどい放射線にあって、露出しているところの皮膚が全部死んじゃったんです。それが死んですぐ爆風が来て、それを引き剥がし、皮膚と着ていた着物がぼろぼろになった物が一緒になって、手足からぶら下がっていたんだそうです。そういうものを下げた人たちが逃げ場を求めてさまよっていたというのが物すごく悲惨だったという話があるんですよ。

私は自分自身が被爆者でないし、それから被爆直後のその状況は見てないのです。だからとても被爆の話をするような資格はないと今でも思っております。林京子さんって御存じですか。

**質問者** はい。小説家ですね。

**瀧** ええ。長崎での被爆体験を書かれて、芥川賞を受けられた作家です。実は私、早稲田大学に1988年、人間科学部の教授で行きました。人間科学部という名前なのに、医者は僕1人しか居ませんでした。木村利人さんという生命倫理の専門家の方がアメリカから帰ってきて、心臓移植の手術はアメリカでは簡単にできるのに、日本では脳死体からの材料がとれないからできない。それは非常に倫理に反しているから、それを含めて医者としての立場から、生命倫理の話をしてくれと頼まれました。その先生の説明を聞いたら、「手術を待っている人は、一日千秋の思いで待っていらっしゃる」と言われたので、私はちょっと待ってくれと思ったのです。臓器移植に使えるような臓器を持っている方というのは、普通元気な方です。その人が、臓器を取り出せるような状態になることを一日千秋の思いで待っているというのは、その方が非倫理的じゃないかと思ったのです。それで一応断りましたが、一方では、空襲や長崎の原爆で本当に死ぬ人をたくさん見て、その人たちが死を前にした時にどう思うかということをお骨の髄まで教えられております。

それからもう1つ、後でお話しするかもしれませんが、長崎の爆心は浦上の天主堂のすぐ近くなので、私が行った救護所でのほとんどの被爆者がクリスチャンだったのです。その方々が起きられない人もみんな助け合って起きて、夕方になるとお祈りをされるのです。それを見たときに、初め

は本当に腹が立ちました。これほどむごいことを信者たちに与えることを許した神様がどうしてお祈りの対象になるのかと思ったんです。神様に腹を立てたわけです。然し、後で考えてみると、あの人たちの祈りは、原子爆弾を作り、落とした人も含めて、人間が犯した罪に対する謝罪の祈りだったんじゃないか、全てを失った人間の最後の、最高の尊厳を見たのでは無いかと思う様になりました。生命に対する極限の悪である原爆と其れに負けない崇高な人間の尊厳。そういうことで良ければ、お話ししてみましょう」と言って、早稲田で初めて原子爆弾の話をしたのです。

**質問者** そういう思いになられたのは、ずっと後になってからということですね。

**濱** ええ、そうなんです。そういうふうに思うようになったのは、随分後になってからですね。実は、全然別の話ですけども、『キャッチャー・イン・ザ・ライ』っていう小説がありますでしょう。サリンジャーの。あの中に出てくる会話ですが、主人公のホールデン少年が寮の同室のカトリックの友人と話をしている。いつもけんかになる話題があって、それは、ユダが地獄に行ったかどうかという議論なのです。御存じでしょう？

そのカトリックの少年は、「キリストは絶対にユダのようなやつは地獄に送ったに違いない」って言うんだけど、「自分は今でもキリストは決して地獄に送らなかつたと思うよ」って言うところがあるんです。人の罪のために祈るというのはそれに似たことのような気がするのです。サリンジャーを知ったのはずっと後ですけどね。

生命倫理での話は人間科学部の合同講義でやりました。700人講堂という大きなところで行ったので、当然のことながらマイクを使っているわけですね。それを録音してあったんです。私は知りませんでした。林京子さんは木村利人さんと友達だそうで、その録音を聞いて、私に会いに来られたんです。それから私は林さんと友達になったんです。それで九大医学部で長崎での救護活動の話が頼まれた時、林さんに、被爆者でない私はとてもそういう話をする資格は無いと思うと云いましたら、自分たち被爆者は、確かに原爆は受けたけれども、すぐに逃げ出してしまつて、周りがどんなだったかを見ていない。濱さんのような人は、後から来たけれども、3カ月間くらい被爆者を身近に見ているから、被爆者よりも良く原爆の現実を知っているんじゃないかと思うとおっしゃって、ぜひ話してくださいって言われたんです。

**質問者** 我々が今回濱先生のお話をお尋ねすることになってきっかけは、今、清水先生からお聞きになったとおりになんですが、我々はもともと全く違う……全く違うと言うと、正確な表現になりませんが、文学、歴史の人間なんです。書いた資料や記録—アーカイブズを保存する専門家で、同時に別の研究—主として書いたものから研究をやってきたわけですが、そういうものも含めて、記録に残っていない重要な証言を記録化して残していくことも、アーカイブズという仕事の非常に大きな分野です。ちょうど総研大で戦争と平和プロジェクトで、こういった記録を何とか残していこうという動きとともに、我々は前から植民地とか南方の占領地とか、あるいは日本国内のさまざまな戦争に関する記録を全国、あるいは世界中で探して保存していくという動きがあった。そういうプロジェクトを1つにまとめまして、一緒にお仕事をさせてもらうきっかけができたのです。

**濱** ひょっとしたらお役に立つかもしれないと思って、持ってきた資料があるんですけどね。これは御存じですよ。そしてこれを書きましたら、この人がね。

**質問者** Murray Peshkin ですか。

**濱** そうです。

**質問者** これをいただいたかったのは、コピーがありますからってここに書いておられるので。

**濱** ええ。で、この人が私の Bangor Daily News 紙に書いた長崎の記事を読んだのです。それで御自分の体験を書かれたのがシカゴトリビュン誌に書かれたマンハッタン計画についての回想を送って下さったのです。この方と私は同じ年生まれなのです。彼は物理学者だから、原爆をつくる方に行き、私は医学部生だったから、被爆者を救護する側になったのです。

それでこれの中でトリニティ。グラウンドゼロというところに行ったときの林さんの記事なんです。これに当たるものを、アメリカ側ではそこに置いた被爆の計量器を掘り出して、持って帰ったときのことが書いてあります。とてもおもしろいですよ。どのくらい線量が残っているかということ。それから周りの砂なんか全部被爆しているということなどです。計量器を掘り出した人はみんな裸になって自動車に乗ったというんです。ところが運転する自分は、車のペダルを踏まなきゃいけないので、

足が熱くなるから、自分だけは靴を履いて、ほかはみんな真っ裸で帰ってきたと書いてありますね。そちらの方にはアメリカ側からの弁解みたいなものが、非常にわかりやすく書いてあります。それはお持ちになってかまいません。きっと参考になると思います。

**質問者** どうもありがとうございます。頂戴いたします。

**濱** 林さんへそこに行くまでは人間だけが被爆者だと思っていたけれども、トリニテでは地球上の自然そのものが黙って耐えていたんだというような意味のことが書かれていて、非常に感動しますね。

(中略)

**質問者** 原爆が落ちた話は、平田病院で実習しているときですか。

**濱** そうじゃなくてね、そのときはどうしてか知らないけど、福岡に帰っていたのです。その帰る途中でね、太宰府の近くに親戚の農園があって、そこに寄ったのが7月の終わりくらいかな。そこで長崎が爆撃を受けた事を聞いたのです。

**質問者** 空襲があって…。

**濱** 長崎大の学生だったその息子が帰ってきて、かなり被害があったということを話しているのを聞きました。それを聞いて、福岡に帰って、それから間もなく長崎に強力な爆弾が落とされたということを知ったんです。

**質問者** そのときは九大の方から連絡があったのですか。長崎に爆弾が落ちたと。

**濱** 長崎に爆弾が落ちた情報は、僕は正確には知らないのだけれども、長崎が被爆して負傷者がたくさんいる。長崎医大も壊滅したということで、長崎県の衛生部から福岡県に救護班の要請があったので、県の衛生部から九大に救護班を送るよという要請があったと聞いています。

**質問者** じゃあ県庁から九大に要請が来た？

**濱** だと思います。そして第一、第二外科、整形外科、第二内科の医師と繰り上げ卒業の4年生21名からなる救護班がつくられ、11日の夜、博多駅から出発すると言う事を聞いたのです。このメンバーに私たち2人が加わって、27名だったわけです(濱氏註：ちなみに、第2次の九大救護班40人が8月末に派遣されています)。

それで平野君という僕の友人と2人で博多駅に行って、「連れて行ってください」と頼んだけど、「切符がないからだめだ」と言われました。

**質問者** 最初、救護班の中には入ってなかった。

**濱** ええ。「切符の数が決まっていて汽車に乗れないからおまへたちは駄目だ」と言われました。それで平野君と2人で博多駅の駅長のところに行って、平野君が熱弁を振るって駅長を説得して、切符を2枚手に入れ、こっそり汽車に潜り込んだのです。本当に班員に入れていただいたのは、長崎の救護本部に着いてからでした。

**質問者** そのとき博多から長崎に行く列車は特別に出たのですか。

**濱** いや、そんなことはないですよ。普通の汽車が行っていたのだけれども、途中で空襲警報が時々出る度にトンネルに逃げ込みしばらく待っていましたので、時間は随分かかったのです。

**質問者** 11日夜に出て、12日朝に着いたのですか。

**濱** 朝になって、長崎に近い長与の駅に着いたら、プラットホームいっぱいには負傷者が筵の上に並べられていました。火傷だから、チンクエールという白い薬を塗って、あるいは包帯を巻いた被爆者がいっぱい並べられていました。異様な雰囲気本当にびっくりしました。

**質問者** 長崎駅にはもう入れない状態だったのでしょうかね。

**濱** 入れなかったんですね、そのときは。

**質問者** じゃあその駅で降りた？

**濱** いや、そうじゃないのです。長崎に着く前の駅で見た状況が余りひどいので、みんなびっくりしたのです。汽車が長崎の谷に入ったら、もう見渡す限り焼け野原でした。

**質問者** トンネルを抜けたときに？

**濱** いいえ、山を回って長崎の谷に入ったらそこは一面の焼け野原だったのです。山のてっぺんまで緑が全然ないのです。

**質問者** 汽車は長崎駅まで行ったのですか。

**濱** いや、行かなかった。途中で降りたのです。長崎の谷で見たものは全部焼け跡の瓦礫の山で見渡す限り生き物の気配は全く見えず本当に地獄に落ちた様でした。

**質問者** 山の途中までば一っと。

**濱** 山のとっぺんまで焼けてしまっていました。しかし、長崎はいいことに市役所なんかがある場所の間に弁天山という山があるので、その向こう側は被害を免れたのです。だから広島より被爆者の数が少なく済んだのです。広島は原っぱでしたから。

**質問者** 市役所がある中心街はまだ残っていた。

**濱** 残っていたのです。だから支那寺なんかのあたりは壊れてないのです。

**質問者** そちらの方には人はいたのですか。

**濱** いたのです。

**質問者** そうですか。その前に広島の前爆の話は、九大には来ていないのですか。

**濱** 全然来てなかった。ひどい被害だということだけは聞いてましたけど。

**質問者** 広島ときは、九大には要請はなかったのですか。

**濱** 来ておりません。あそこはね、ほとんど陸軍がやったと聞いています。

**質問者** 全部陸軍が。

**濱** やったのです。あそこは大きな軍事基地だった。それから呉にも近いしね。だから軍がほとんどやったのだと思います。

**質問者** 大学の医学部の学生を使った救護班は編成されなかった。

**濱** 正確には知りませんが、なかったと思います。福岡ではただ特殊爆弾というのが落ちたという話を聞きました。

**質問者** そういった話だけで、具体的にどういうものかは…。

**濱** ええ。全然聞かなかったのです。報道もすごく統制されていましたからね。

**質問者** じゃあその長崎の場合も、どうもやられたということだけを聞いて急遽行ったのですね。

**濱** そんな具合だったと思います。

**質問者** そのときに平野さんというお友達と濱さんの2人がどうして行きたいと言ったのですか。

**濱** さっき言った様に、僕の兄は第二外科の助教授をしていて、平野君はその医局に出入りしていましたので、救護班の話を知ったのです。

**質問者** とにかく行って見てみたいというのがやっぱりあったのですか。

**濱** 6月の福岡空襲で私たちにも手伝うことがあることを知っていたのです。

**質問者** 自分もやれるということですか。

**濱** 医者には1人もいないのだという話でしたから「行って手伝おうか」と言って行ったのです。

**質問者** 実際行って、救護活動をされたということですが、救護した場所は浦上の爆心地の近くですか。

**濱** 山里国民学校というのがあって、ここなのです（写真を示す）。

**質問者** これですか。ああ、すごい。残ってるんだ。

**濱** だからここらは全部こういう。

**質問者** この校舎だけが残って…

**濱** 鉄筋3階建ての骨組が残っていたのです。それは谷のこちら側です。谷の向こう側も全部壊れてしまって、半分壊れた城山国民学校の建物だけが残っていました。他は何にもない。この中を歩いていったわけです。汽車を降りて。そうしたら、本当にこんなふうにごろごろ死体が。

**質問者** みんな倒れているわけだ。

**濱** 本当にこんな感じでした。もちろんこの写真は僕が撮ったのではないのです。

**質問者** 完全に真っ黒焦げ。

**濱** 丸焦げになっていました。だけどこの人たちは直接被爆で亡くなったのではなく、恐らくそこから逃げていく途中で焼かれて死んだのでしょね。爆心で直接被爆した人達の死体が、あの高温でどうなったか想像もできません。電車の中の人、座ったままで亡くなっていました。

**質問者** じゃあ電車の客車がそのまま放置されていた。

**濱** バラバラに壊れた電車の椅子に座ったままの死体が並んでいました。

**質問者** 当然こういう死体が転がっていても、収容することは…。

**濱** そのときまではまだ収容はやってなかった。

**質問者** じゃあ完全に野晒し？

**濱** 野晒しでしたね。それは見ましたけど、さっき言ったみたいに、襤褸は見えていないのです。襤褸の写真も無く、被爆直後を見た人の記憶による絵しかない訳です。

**質問者** そうですね。

**質問者** これは誰が撮影したのですか。

**濱** 現状を実際に撮った長崎の人がいたんです。見つかると全部取り上げられてしまうので、隠していらっしやっただけですね。当時の記録写真が無いので、私は、日本人は死体にカメラを向けないという安易なヒューマニズムがあって、それをやらないから、データが残らないのだと思っていました。だからあれだけのことが起こったのに、現場を示す写真の記録が1つもないのではないかと残念に思っていました。ところがちゃんと撮ってらっしゃる人がいたのです。

**質問者** これは長崎の写真家が自分で撮って歩いて…

**濱** 撮っておられたのです。

**質問者** じゃあ本当の直後ですね。

**濱** 直後ですね。そして、私たちもまさにこの状況のところを歩いたわけです。

**質問者** この写真はどうやって手に入れたのですか。

**濱** 原爆記念館の写真集からです。こういうことに使えますよという許可をもらったのです。この写真は違います。これは原爆記念館にたまたま行ったら、「おや、僕じゃないか」と。

**質問者** 自分が写っていた。

**濱** この写真の子なのですよ。頭の毛が抜けてしまっていてね。島田さんという女の子だったと思います。多分あとでお話しする原爆症で亡くなったと思います。

**質問者** 山里国民学校の場合、窓とかは、当然吹き飛ばされてますよね。

**濱** それはもう本当に窓は吹き飛ばされ、建物の中は壁が落ち、床板は剥がれてしまっていて、それを並べ直して、その上に箆を敷いて収容したのです。

**質問者** 骨組みだけはあった。

**濱** 骨組みだけは残っていましたが、ガラスも、窓枠ごと全部吹き飛ばされていました。その碎け飛んだガラスが人に刺さっているわけです。何処でも同じ状況が起こり、担ぎ込まれてくる人はみんな全身にガラスが入っているのです。だからそれを取り出して傷を消毒する。火傷の手当てをする。そういうことしかできなかった。

**質問者** 実際にそこに収容されている人は、両方負っているわけですね。火傷とガラスが刺さって。そういう場合の救護はどういうことをするのですか。

**濱** ガラスを取り出して消毒し、火傷にはチンクエールを塗って包帯をする訳です。弱った人には強心剤を打つとか、痛みがひどかったら麻薬をあげるとか、その程度のことです。それから骨折があるのは、できるだけ復旧してあげるくらいしかできなかった。傷害が酷い被爆者達のほとんどは長くはもちませんでした。

おかしい話と思われるかもしれないけど、戦時下では蝋燭も貴重品だったのですよ。だから、夜は真っ暗になるので、夕方になると、宿舎に帰るのです。それで次の朝に行ってみると、夜の間、苦し紛れにはい出してきた人たちの死体が、いっぱい転がってました。

**質問者** 学校の校庭とかにですか。

**濱** いいえ、助けを求めて処置をする机を並べている周りとか、階段とかまで来て亡くなっていました。朝になると勤労奉仕の人が来ておられて、その人たちが外に運び出して、火葬するのです。だけど火葬と云って、周りから材木を拾ってきて焼くわけだから、燃料が足りず、焼き切れない死体は積み上げてあるわけでしょう。夏ですから、すぐ腐るのですよ。そして、蛆がすぐわきました。生きている人にでも、傷があると蛆がわくのです。

(濱氏註：収容されていた被爆者の主な症状は血便でした。被爆直後は皆緑色の嘔吐と便を出したと言いますが《多分胆汁》、私たちが行った3日以後では血便でした。はじめ赤痢を疑って消毒に勤めま

したが、そうではなく、腸の上皮の壊死による出血らしいと分かりました。後で見た解剖の所見で腸の上皮とリンパ組織が完全に壊死していた事が分かりました。酷い火傷を負った人達は血便にまみれて死んで行かれたのです。）

**質問者** 学校と宿舎は近くにあったのですか。

**濱** そこら辺には泊まるどころはなくて、この辺なんです（地図を示す）。

**質問者** 随分遠いですね。

**濱** 市役所などがある近くです。この山の下に諏訪神社があり、その近くに富貴楼という昔の料亭があって、その料亭が徴用工の宿舎になっていたのです。そこが九大からの救護班の宿舎に決められていました。

**質問者** 富貴楼ですか。

**濱** 富貴楼に泊まって、次の日の朝、出かけていきました。

**質問者** 歩いてですか。

**濱** 途中までトラックで行けるのですが、あとは歩いて行くのです。

**質問者** 市内の中心から浦上の近くまで。

**濱** この爆心を歩いていくわけですよ。でもそのころ既に少しずつ道沿いにある死体は片付けられていました。その当時長崎に近い香焼島という島に造船所があって、その辺に働きに行っていた人達は被爆していないのです。だからその人たちが帰ってきて、家族の死体を見つけて、火葬しておられました。山里に行く途中にも火葬した跡がいっぱいありました。

**質問者** 道のあちこちに。

**濱** ありました。

（濱氏註：収容した人達も次々と血便にまみれて死んで行かれました。亡くなった人達は近くから来た救援隊の人達が外に運び出して焼きます。燃料になる材木が足りないので、焼き切れない死体は運動場に積み上げられ、夏の日差しの下で腐敗した悪臭を放っていました。山里の丘から見える瓦礫の谷間の至る所から、死体を焼く煙が立ち上り谷を覆っていました。人肉の焼ける臭いと、腐敗の臭いが辺り一面に立ちこめていて、体に染みついた臭いは宿舎で水を浴びても取れないくらいでした。その臭いは長崎の一番強烈な記憶となっています。）

**質問者** 各自が勝手にやるんですね。

**濱** 死体の処理について、本当に不思議な体験をしました。私の中学時代の友人で中島君という人は、当時九大工学部の学生だったので、山里に近いお姉さんの家に泊まって、香焼島造船所で勤務奉仕をしていました。8月9日の夕方帰って見たらお姉さんの家族4人が全員亡くなっていたのです。その死体を自分で火葬して、骨を持って福岡に帰ったと聞きました。

ところが、先ほど今年の5月に同窓会をしたと言ったでしょう。そこにいた1人が、うちのおばあちゃんも長崎の原爆で亡くなったと言うのです。娘さんがおばあちゃんの骨を焼いて、まだ熱い骨を空き缶に入れて福岡に持って帰ってきたが、缶が熱かったのを覚えているとの話を聞きました。なんとその娘さんの家が中島君の家の向かいの家なのです。本当に不思議なことだと思いました。

**質問者** それぞれが自分たちで。

**濱** 自分で骨を。長崎医大でも低学年の学生はほとんど死んでいますから、父兄の人達は教室やなんかにある骨の中から何かの手掛かりで、縁者の骨らしいものを見つけて持って帰られたのです。

**質問者** じゃあ長崎医大にも家族の人が来て、それらしいものを持っていったのですか。

**濱** 家族の人たちが見つけて。医大も私たちと同じように3年で卒業させるわけですから、高学年の人は臨床だったのです。臨床の病院はコンクリートの建物ですから、たまたま柱の影なんかにいた人は助かっているのです。基礎は木造の校舎だったのです。だから詰め込み教育に出席していた1年生は殆ど全滅したのです。

**質問者** 長崎医大はかなり爆心地に近いですが。

**濱** 非常に近いです。

**質問者** コンクリートで助かっている人というのがいるのですか。

**濱** いるのです。林京子さんも勤務奉仕で爆心に近い軍需工場におられたのです。多くの仲間は亡くなったのに助かっておられます。ご自分でも何故だか分からないと言っておられます。本当に運で

すよ。たまたまそのとき柱の陰にいた人は助かり、窓際にいたというような人たちは全部死んでいきます。

**質問者** 実際の救護活動は、山里国民学校のエリアは九大とか、そういうふうに決まっていたのですか。

**濱** 山里には九大だけだった様に思います。

**質問者** 九大だけだった。

**濱** はい。だけど海軍の人たちが初めちょっとやっていたのです。それを引き継いだわけです。

**質問者** じゃあ次の日の12日に着いたときには、既に軍の。

**濱** 軍というか、看護兵が3人くらいいました。

**質問者** 応急的にやっていて、それを引き継いだ？

**濱** 多分そうでしょう。だからその人たちが最初の被災者は収容していたわけです。初めのころ来た人はね。

**質問者** ほかのところにも救護班は当然ありますよね。それは長崎医大の生き残った人とかがチームを組んでやっていたのですか。

**濱** 九大班は長崎医大、長崎高等商業、新興善にも行っていますし、少し後からは熊本医大も行きましたので、それぞれチームを組んでやっていたのでしょう。他は余り知りません。終戦後しばらくしてからは、いろいろな人たちが来ました。東大の調査団とかね。

**質問者** 調査団？

**濱** 来ましたよ。甘利さんといったかな。たしかね、福竜丸っていったかな。

**質問者** ああ、第五福竜丸。

**濱** 第五福竜丸の被爆者治療に当たられた甘利さんがあのときも東大の内科の助教授で来ておられました。東大の調査団は多分、清水教授が団長で、米軍の調査団と一緒に来たのだと思います。

**質問者** 救護というよりは調査。

**濱** そうだと思います。

**質問者** 東大はいわゆる調査団として来ていた。

**濱** そうだと思います。

**質問者** でも調査の主体は米軍になるのですね。

**濱** そうでしょうね。

**質問者** 米軍がやって来る前、戦争が終わる前に、調査団みたいなものは？

**濱** それは来ていません。

**質問者** 陸軍か軍の関係者も？

**濱** いや、軍の調査は無かったと思います。川棚というところに海軍の病院があり、そこから軍医さんが派遣されていた様です。山里にも衛生兵がいましたし、私たちが8月末に新興善に行った時には、川棚から来た軍医さんが2人と予科練の若者が3人いました。

**質問者** 2人。じゃあそんなに大がかりではなかった。

**濱** ええ。何処の救護所でも被爆直後はその程度だったのだと思います。私たちが行く前に収容された人は余り多くなかったと思います。そして、他の救護所も同じだと思いますが初期に山里に収容された人はほとんど亡くなりました。アメリカ軍上陸の噂があり、8月20日ごろには九大の救護班も引き上げの時期になり、救護所も維持できるかどうかわからないということだったので、少し軽い人の一部は九大に送りました。

**質問者** 米軍が上陸するかもしれないということで、わざわざ送った。

**濱** どんな米軍が来るか分からないので送ったのです。(濱氏註：日本軍が中国でやった事はすでに民間には伝わっていたので、占領されたら、何をされるか分からないと福岡では田舎に避難する話があったそうです。実際満洲ではソ連兵によって酷いことが起こっていますし、後で出てくる人工流産の話も関係があります。)

けれども、九大に送った人はほとんど亡くなりました、と思っていたのですが、なんと新興善から九大に送られて助かったという人に会ったのです。原爆60周年が長崎であったときに、林京子さんに誘われて出ましたら、林さんの同級生だったその人に会いました。

**質問者** その人だけが生き残ったのですか。

**濱** じゃないかと思いますよ。

**質問者** ほとんどの人は？

**濱** 全部亡くなったと思います。山里にいた人なんかもね。

**質問者** 話は戻りますが、これが原子爆弾だという情報や認識は、九大を出発したときからあったのですか。

**濱** ないのです。

**質問者** 最初はやはり特殊爆弾みたいなものだとか。それもなかったのですか。

**濱** もっとのん気な話で、ピカドンって知っているでしょう。

**質問者** ええ。ピカドンって言いましたね。

**濱** 特殊爆弾はピカッと光ってドンと来るから、ピカッと光ったら防空壕に逃げれば助かると言われてきました。長崎の現場を見て、とてもそんな生易しいものじゃないということがよくわかりました。

原子爆弾というのは、想像はしたかもしれませんが、それがどういう影響を持つかということは誰も分かっていなかったと思います。それで『黒い雨』を見てもわかるように、近隣の村や町から沢山の人が来られて、子供や縁者の行方探しや、遺体探しをしたり、見つかった遺体の火葬などを手伝いました。その人達の多くが2次の原爆症で亡くなったのです。それほど恐ろしい2次被爆の危険があるということを皆分かっていなかったのです。

私は13年後の1958年に広島大学の教授になったので、広島に行きました。そうしたら、医学部には手足とか顔とかにケロイドを持った人達が何人もおられて驚きました。

一番かわいそうだと思ったのは、ケロイドを持った人の中に、知能障害のある原爆2世を持つ人がいた事でした。原爆は明らかにそういう影響を残しているのがわかりました。長崎にいたときは、まだ郊外なんかを見る余裕は全然なかったのだけど、広島で郊外に散歩に出たら墓地があって、享年十何歳とか、昭和20年8月没とか彫り込んである墓石が並んでいるのを見ました。村から沢山の中学生が勤労奉仕で広島に出て、皆死んでしまったのでしょうか。哀れさに胸が塞がる思いがしました。

**質問者** 長崎に救護団が20人くらい行って、その中で被爆した方はいらっしゃるのですか。

**濱** 白血病になって1人亡くなったと聞いています。

**質問者** それはいつ発症したのですか。

**濱** はっきり知りませんが、数年後になってからです。

**質問者** 随分後になってから。

**濱** そうです。私自身も、長崎にいる10月頃に白血球が1200くらいになったことがあります。

**質問者** 誰もがそういう異常が出たのですか。

**濱** 誰でもかどろかは知らないけど、かなりの影響があったのだと思います。爆心地に比較的近い所で救護をやっていましたから。

**質問者** そういう体の異常は個人差があると思うのですけど。

**濱** 物すごくありますね。

**質問者** 早い場合は、救護活動中に出てくることがあったのですか。髪が抜けてくるとか。

**濱** 私の場合、貧血と白血球減少だけで、髪は抜けなかったです。最近、先生は原爆が役に立って長生きしてるんじゃないかと言われることがありますよ。

**質問者** 逆に(笑)。

**濱** 言われることがありますよ。

**質問者** やはり多かれ少なかれ、何か異常がそれぞれ出てくるのですか。

**濱** いや、それはわかりません。人によって随分違いますからね。遺伝的に違うのかもしれない。それからその人の被爆した状況が違っていたのかもしれない。それから年齢が違っていたのかもしれない。だからそういうことが本当に解析できていないので、わかりませんね。何とも言えないと思いますよ。だけど少なくとも影響があった人は確かにいます。僕と一緒にいった平野君は肝臓癌で亡くなりました。

**質問者** それは戦後大分たってから。

**濱** 帰ってきてから、大分たってからね。



**質問者** 行く前には、放射能の影響があるということは、全く知識もなく、知らされてもいなかったということですか。

**濱** 知らされていないだけじゃなくてね、こういうことがあったのですよ。九大から助教授の人がちょうど9月初めの第2期原爆症で死者が続出している最中にやって来られて、「学校はもう始まっているからこんなところで遊んでいないで早く帰ってこい」と言われたのです。たしかに私たちは出血と高熱に苦しみながら次々と死んでゆく人達に何一つ治療をすることが出来ませんでした。どんなに手を尽くしても出血を止めることも、死を止めることも出来ませんでした。それでも被爆者達は藁にも縋る思いで「助けてください」と手を合わせて拝まれるのです。遊んでいると言われてもしょうがないとは思いましたが、そんな人達を放り出して大学に帰ることはできないと思いました。更に、「放射線というのは、少量は治療効果があるが大量になると壊死を起こす。そんなことは昔から分かっている。お前達はこんなところにも何一つ新しいことは学べない」と言われました。この言葉は絶対に許せないと思いました。今まで人類が経験した事が無い原子爆弾で、治療の手段も目当てさえも無く、目の前で人が死んでいっているのですよ。「何一つ学べることがないとは何事か」と思ったので大喧嘩になったのです。その先生が帰って、事務から「帰ってこい」と言ってきて、最終的に「帰ってこないと除籍する」と言ってきたのです。3人とも医学部がどうか分からないし、世の中がどうなっているかも分からないものですから、「辞めさせるなら辞めよう」と言って、3人とも帰らなかったのです。そうしたら、貝田先生という別の助教授の方が来られて、現状を見られ、「分かったから、気が済むまで働いて帰りなさい。学部長には説明しておくから」と言って帰られました。帰って学部長に報告に行ったら、学部長が「貝田君から聞きました。ご苦労さまでした」と言われ、放校されずに済みました。

その後で、放校すると言った事務長が「戦時中は心ならずも皆さん方にいろいろな厳しいことを言ったけれど、今後は公僕として学生諸君のために働きますから、前のことは許してください」と言ったのです。そのとき私は、公僕という言葉は初めて聞いたのです。しかし、そのうちに事務局は管理局となり、公僕はいなくなっていました。

その話が林京子さんが書かれたラジオ放送になっています。それがこれです。「フォアグラと公僕」。アメリカでは、ヨーロッパやアジアの戦場から凱旋してきた兵士達には、1週間の休暇があり、大統領からの歓迎の贈り物として、フォアグラは食べ放題、ぶどう酒も飲み放題だった。フォアグラを腹一杯食べたのは兵士達にとって生まれて初めての経験だった。休暇が済んで、うちに帰って見たら、周囲の対応は冷たく、元の貧しい生活に戻ったという、アーリントン墓地での追想の話です。「フォアグラと公僕」というのを書いてくださったんですよ。本当にね、笑い話ですよ。だけど僕らはやっぱり胸くそ悪いですよ。胸くそ悪いというのは、公僕がなくなったからね。今でも公僕のはずじゃないですか。ねえ？ 管理局って何を管理するのって。冗談じゃないよ。

**質問者** 最初に20人行ったメンバーがずっと10月まで残っていたのですか。

**濱** いや、そうじゃありません。

**質問者** だんだんと替わられたのですか。

**濱** 全部そのときに引き揚げちゃった。それであと3人だけが新興善に残った。

**質問者** 徐々に減っていった？

**濱** いや、一度に帰ったの。

**質問者** それはいつごろですか。

**濱** 8月末近く。

**質問者** 8月末に一斉に帰って、3人だけ残られた。

**濱** 帰っちゃった。で、僕らは。

**質問者** 10月。

**濱** いえ、一緒に帰ったんですよ、一応。

**質問者** 一度帰ったんですか？

**濱** けども人を残しているでしょう。それでまた行ったのです。

**質問者** それは3人が自発的にですか。

**濱** いえ、そのときは平野と私の2人で行ったんです。そして、新興善というところに行ったら、

そこはさっき言った海軍の川棚から来た人が残っておられてやっていたから、そこに入ったんですよ。もう1人の友人(猪野)は、後で福岡から1人でそこにやって来ました。鍋を腰にぶら下げて、自炊するってやって来ました。で、その3人で残ったんです。

**質問者** 山里国民学校の救護班は8月末に帰ったのですね。

**濱** もう解散しちゃったわけです。第1次救護班は。

**質問者** 帰って、その後に自発的に2人で戻った。

**濱** 自発的に行っているのだから、何も命令されて行っているわけじゃないのです。だから遊んでいると言われたんです。

**質問者** そのときは山里国民学校ではない、別のところですか。

**濱** 新興善というところですよ。「新しく」、「興る」、「善い」。それはつい最近までありましたよ。後で長崎医大の附属病院になったのです。

**質問者** 一旦帰られてまた来られるまでの間はどのくらいあったのですか。

**濱** すぐ行きました。

**質問者** 数日という感じですか。

**濱** はい。

**質問者** じゃあ新興善は全く別の患者さんを。

**濱** 全く別でした。

**質問者** 8月末で山里国民学校はどうなったのですか。

**濱** ええ。それこそ閉鎖になったのですよ。山里に行ってみたらなかったのです。それで新興善に移っているというのを聞いて、そっちに行った。

**質問者** 8月末段階で、大体半月くらいの間に、患者さんのほとんどは亡くなった？

**濱** ほとんど亡くなりました。直接大量の被爆をした人は。

**質問者** 中でも軽症患者だけは九大に送ったのですね。

**濱** 九大に送りましたね。

**質問者** それで解散なんですか。

**濱** ええ。だから新興善に行ったのは、平野・濱の2人と後から来た猪野君の3人だけでした。

**質問者** そうしますと、新興善の救護所は、1次より2次被爆の人を。

**濱** 2次被爆の人達はそれぞれ地元の医師の治療を受けた人が多いと思います。私が行った8月の終わりに近い頃は、直接被爆したが、何らかの理由で重症にならなかった人達だったと思います(濱氏註：2次被爆とは、私達の様に、被爆地に後から入って残留放射能による被爆を指します)。

血便を出した人や酷い火傷のあった人達は亡くなり、8月末から9月初め頃の被爆者達の症状は、貧血と脱毛が主で大体落ち着いていました。貧血がありますので、それで私達は血液検査をしていました。そのデータは全部召し上げられました。持って帰っちゃいけなかったのです。

**質問者** そのデータは、新興善の救護所に置いていったのですか。

**濱** ええ。でも、どうなったか知りませんよ。

**質問者** 実際、そのデータはどこが管理していたのですか。

**濱** 知りません。

**質問者** 中心になっていた人たちというのは。

**濱** 今から考えてみるとメンバー構成がどうなっていたのか全然わかりません。終戦後ですから、海軍の軍医だった人も既に軍医じゃないはずで、日赤の看護婦さん10数人いましたが、日赤も無くなっていたかもしれないし、それから、海軍の予科練航空兵が3人くらい手伝っていましたが、そういう人たちもどういう身分でどういう立場だったのか、全然わかりません。外来は長崎市医師会の方がやっておられて、日赤の看護婦さんと予科練の人が手伝ってました。私達学生は手分けして収容者の治療を手伝ってました。多分全員が私達のようにボランティアでやっていたのだと思います。だから指揮系統は混乱していて、記録も残っていないけれども非常に人間関係がよかったですよ。

**質問者** 米軍はまだ来ていなかったのですか？

**濱** 上陸はしていたと思いますが、初めは米軍は来ていなくて、しばらくして来ました。けどもその米軍も割と……何というかな。米軍は、東京に来た人たち、日本の大学なんかには視察に来た連中

は物すごく厳しかったのですよ。官僚ですよ。ところがね、あそこに来ているのは、野戦の軍医さんだった。だから日本と同じように、普通の医者が軍医になったような人間だったので、割とソフトだったですよ。たださっきみたいに、"Vessel is too small!" ということは言いましたが、割とよかったです。そして、国際赤十字からは薬をたくさん送ってきました。

**質問者** じゃあ薬は赤十字経由で全部来たのですね。

**濱** ええ、赤十字から。いろいろな薬品が入っていて、サルファ剤という消化器の感染症とか、傷に使うようなものがよく入ってきました。だから助けられたという感じが確かにありました。

**質問者** それは2度目に行かれたところからの話ですね。

**濱** もちろんそうです。

**質問者** 最初の山里時代、12日に入ってから、3日経つと15日ですね。玉音放送は聞きましたか。ラジオがないでしょうが…。

**濱** 天皇の放送は全然聞いていないのです。

**質問者** 敗戦はどうやって知ったんですか。

**濱** 米軍機からビラを蒔いたという話です。そのビラに何て書いてあったか知らないのだけれども、どうも戦争は負けたらしいということを看護兵から聞きました。それで帰りに、市役所に救護本部というのがあって、そこに寄ったらね、敗戦という告示が出ていた。そのとき正確に知りました。

**質問者** 同じ日、15日に山里で救護をやって、本部に帰ったときに初めて知ったということですか。

**濱** 初めて知りました。敗戦と聞いてホッとしたとか、嬉しかったと言う人もありますが、誰も戦争に負けて嬉しいことはないですよ。だから終戦という言葉に置き換えて誤魔化しているのだと思います。私達の場合は、目の前で人が死んでいるわけですよ。沢山の人が死に、今からでも死んでいくわけだから、その人たちの死は本当にむなしい気がしました。それで平野君と2人で泣きながら帰りました。

**質問者** 敗戦を知って。

**濱** ええ。しかし、被爆者にとっても、我々にとっても、原爆症との闘いは始まったばかりで、終戦なんかないと思直して次の日の診療に出かけて行ったのです。

**質問者** 実際はまだずっと続いているわけですね。

**濱** 全く同じことがね。そのときまでまだ山里だったのです。山里は浦上の天主堂に近く、被爆者の多くもカトリックの信者さんでした。夕方になると身動きも出来ないほど傷を受けた被爆者達がお互いに助け合って体を起こし夕べの祈りを捧げる姿が見られました。そしてその人達も血便にまみれながら次々に亡くなっていきました。悲しさに打たれると同時に、敬虔な信者達をこんな酷い目に遭わせることを許しながら、祈りの対象になっている彼らの神に対して怒りを覚えました。しかしそれは間違いで、あの祈りは原爆を作り、それを人間の上に落とした人達も含めて人間が犯した罪の許しを乞う、全てを喪い、命までも喪おうとしている人間の最後の尊厳を見たのではないだろうかと思うようになるには長い年月がかかりました。

**質問者** その祈りの姿を最初に見たのは、山里の救護所に入ってすぐですか。

**濱** そうです。敗戦を知る前くらいの時期ですよ、それを見たのは。

**質問者** 祈りは日課ですから、毎日あるんですね。

**濱** 毎日ずっと続いていましたよね。それで順々にその人たちは全部死んでしまった。

**質問者** 少なくなっても毎日行っていた？

**濱** ええ。

**質問者** 祈りの時間は決まっていたのですか。

**濱** 夕方です。

**質問者** 夕方に必ず？

**濱** ええ。それだから深く印象に残っているのです。ガラスが無い窓から差し込む真っ赤な夕日の中に白く包帯を巻かれた人達が、互いに体を助け起こしてお祈りをしておられる。何とも言いようのない光景でした。

**質問者** 必ず夕方に。

**濱** お祈りをしておられた。それなのに、皆さん御存じかもしれないけど、賀川豊彦という人が広

島の瓦礫の街を見て「大いなる神のお告げだ」と言ったのです。光化、光に化す、きれいだと言ったのです。それにはものすごく腹が立ったんです。あの破壊と殺戮を許すということが出来るのは、原爆で死んでいった人しかいないと思うのです。しかし、憎しみと恨みから平和は生まれません。生き残った人間にできる唯一のことは、原爆反対ということをやめまで言い続けることだと思います。本当にそう思いますね。

私がさっき「麻生が」と言ったのはね、「日本にも原爆武装の話が出ています」と言ったのです。馬鹿かと思いませんか。限定核戦争なんていうのが起こったとしたら、一番初めにターゲットになるのは米軍基地のある日本ですよ。恐らく1000万以上の人が死にますよ。そんなこともわかっていないのかと思う。そして本当に原爆の応酬が起こったら、人類は文字通り滅亡するでしょう。

**質問者** そのときは神様に対する憤りもあったでしょうが、アメリカ軍、アメリカ兵に対する感情は、やはりかなり強かったのですか。

**濱** 原爆を落としたことに対しては、物すごく腹が立っていました。だけど来ていた個々の兵隊は普通の人間のように見えました。威張り腐った日本の軍人達よりましでした。それはひどいものでしたよ、若い軍人たちは。あの連中は絶対死なないんだから。

**質問者** そうですね。

**濱** こちらはかり出されて死ぬんですけどね。

**質問者** 山里の救護所にいるときに初めて米軍に会ったのですか。それはいつですか。

**濱** そのことは、正確に覚えていません。多分、山里のころの最後くらいに会ったんじゃないかと思いますがはっきりしません。

**質問者** 記憶としてはそんなに残っていない。

**濱** その程度です。僕は余りはっきり覚えていません。つまり余り混乱もなかったということでしょう。

(濱氏註：新興善で10月の初め頃、出血を伴う第二期の原爆症で死者が続出した頃、米軍が屍体解剖を行いました。あるいは小野先生の解剖に立ち会ったのかもかもしれませんが。その時、解剖室に飛び回っていた蠅をDDTの噴射で全部一息に殺してしまうのを見ました。その時、気に喰わぬものは一度に殺してしまう、原爆と同じ思想を見た気がしたのを憶えています。)

(濱氏註：先述した”Vessel is too small!”と言ったというのは、同じ頃、第二期の原爆症の出血が如何にしても止まらないので、全血の輸血をアメリカ軍医がやった事があります。米兵用の太い針を使って少女に輸血を試みていましたが、如何にしても上手くいかないと怒っているの、「針が太すぎるのだよ」と言ったら、「馬鹿を言うな、血管が小さすぎるのだ」と怒鳴り返されました。そんな人達なのかと思った記憶があります。そんな訳で米軍の振る舞いを全部受け入れていた訳ではありません。)

**質問者** 意外と平静に。

**濱** ちゃんと整然と入ってきたんだと思いますね。余り問題は起こらなかった。だけど無いことはないのですよ。掘っ立て小屋の中に病気で寝ていた女の子が強姦されて担ぎ込まれてきたことがありますから。

**質問者** それは長崎ですか。

**濱** 長崎で。だから全然問題がなかったことはありませんが、一般的に言ったら、割と穏やかでしたね。あの時期に言われていたことは、日本が南京事件なんかでやった事と同じようなことをアメリカ軍もするというので、みんな山の中に逃げたとの話です。しかし、そんな事は無かったのです。

**質問者** 意外と平穏に。

**濱** そうだったですね。

**質問者** 新興善での救護所時代になると、アメリカ兵が頻繁に来ることになるわけですね。接触はどうでしたか。

**濱** そんなに頻繁ではなかったけど、来ることは確かに来た。それだけじゃなくて、調査団が入ってくる。それで、いろんなことがあって、おかしいのはね、私は小学校の運動会のおかげから救護所には赤十字がついているのを見ていました。もともとボランティアみたいなものが赤十字の始まりでしょう。ところが、国際赤十字に属していないところに赤十字の旗をかけているのはけしからんとい

て、外させられたのです。新興善で。

**質問者** そうなんですか。

**濱** そういうことは酷く杓子定規だと思いましたね。看護婦さんは帽子と腕に赤十字のマークを付けていたのですが、それは全部剥ぎ取られたのです。

**質問者** 敗戦国になって、国家としては無くなったわけですからだめだと。

**濱** 知りませんが、とにかくだめだということで。

**質問者** 全部没収ですか。

**濱** 全部外しましたよ。そんなことより、食べ物については悲惨を極めていました。

前に総研大でお話したかもしれませんけどね、おむすびと紅しょうががしかなかったのです。戦争が済んだときに、陸軍は食糧の備蓄を沢山持っていたそうですが、軍が解体された時にそれぞれ勝手に持って行ってしまって、残ったのは味噌の樽と紅しょうがの樽だけだったそうです。それで具のないみそ汁に、おむすび1つと紅しょうがを3カ月近く食べたので、もう本当にうんざりしましたよ。被爆者達も同じで、栄養失調寸前でした。

**質問者** これはどこから配給が来るのですか。

**濱** それは知りません。

**質問者** それはわからない？

**濱** ええ。どこかそこらで炊き出しをやっていたのでしょう。多分、市から来たんだと思いますね。あんまり被爆者達がかわいそうだから市役所に交渉して、肉を分けてもらうことにしましたが、屠殺所では肝臓しか手に入りませんでした。肝臓を煮て配ろうと思ったけれど、煮る味噌も塩水さえも手に入らないので、消防に頼んで、海から塩水を汲んできてもらいました。

それから、近所の農家に行って頼んだが芋はくれなくて、芋の葉をもらってきて、肝臓と芋の葉を塩水で茹でたのを配ったりしていました。

(濱氏注：被爆者達の食事を何とかしなければと思っていた時、たまたま猪野君と2人で支那寺に行ったら、寛永の飢饉の時、お寺で炊き出しをして貧民に配ったとの立て札を見て、我々もやってみようと思ったのです。当時、市中には肉が出回っていると聞いたので、市役所に交渉して屠殺所で肉を分けてもらうことにしました。屠殺所に行ってみると確かに屠殺が行われていましたが、肉は貰えず、肝臓しか手に入らなかったのです。)

**質問者** 山里時代も水とか急に必要なものがあつたと思うのですが。

**濱** 水はね、井戸があつたんですよ。

**質問者** それは近くの井戸ですか。

**濱** 近くの井戸から汲んできた。

**質問者** 放射線に汚染されている可能性があるのでは。

**濱** かもしれないけど、それを言っちゃいられなかった。

**質問者** というか、その当時はわからなかった。

**濱** わからなかった。

**質問者** そういう認識はなかったのですかね。

**濱** ないですね。

**質問者** とにかくその井戸から水を汲んだ。

**濱** 水を汲んできて、それで消毒薬をといたりなんかして。

**質問者** 御自身も飲まれていたのですか。

**濱** 飲んだんでしょねえ。飲まないと生きて行けませんもの。そう思いますよ。覚えていませんね。

**質問者** アメリカ軍の調査団とさっきの東大の調査団はセットで来たのですか。

**濱** 一緒に来たように思いますが、はっきりは憶えていません。

**質問者** どのくらいの期間調査をしていたのですか。

**濱** かなり長くやられたような気がしますね。調査団の甘利さんという方は、気さくな方で「花も嵐も踏み越えてか」なんて歌を歌いながら顕微鏡を見ておられた。その人から斎藤茂吉の歌を教えてもらった。「あはれあはれ ここは肥前の長崎か 唐寺の甕に降る寒き雨」。御存じですか。

**質問者** いえ、それは知らなかったです。

**濱** 『赤光』の歌です。それを教えてもらいました。そういう方だったのです。

**質問者** 調査団は具体的にどういう調査を？インタビューを受けたのですか。

**濱** それは知らないんですよ。どういう調査か。多分ね、視察だったと思いますよ。軍隊が来たりなんかしたのは。学生はインタビューを受けていません。

**質問者** 何かそれに協力をされたことはないのですね。

**濱** ないですよ。

**質問者** 何か聞かれたということもない。

**濱** 米軍との直接の接触はありませんでした。たださっきの輸血のように、試してみるんですね。止血剤が何も効かないから、こういう止血剤を使ってみたらどうかとか。

止血剤を試すことに関わって、ひとつお話したことがあります。一家6人の家族で、一番上の娘とおやじさんは、造船所において被爆していませんでした。下の子供3人とお母さん達の皮下に点状出血が出て来たのです。その時、効果を試す止血剤が1人分だけ回ってきました。誰に使うか悩んでいましたら、お母さんに「この一家にとって一番大事な人は私だから、私に使ってくれ」って言われました。母親神話では、雉の母親は火の中で小鳥を抱いて死ぬって言われています。けれどもそれは物語ですよ。人は自分が生きたいと思うのが、本当の心だと思いました。だから今でもね、living will ということを書いて、臓器提供の約束をさせるでしょう。しかし死にかかったときの人間の気持ちは誰もわからないでしょう。少なくとも私が見た人は、全部「助けて下さい」と言っていました。living will というのは恐ろしい言葉だと思います。

(濱氏註：9月初めに突然被爆者を襲った第二期の原爆症の症状を説明しておきます。貧血と脱毛以外にはほとんど症状が無かった被爆者達の皮下に点状の出血が起こり、2～3日でそれが全身に広がり、突然発熱とともに鼻、口、肛門から出血が起こります。筋肉の中にも出血して激しい痛みを起こします。止めどなく出血が続き、どうしても止まらず、一週間くらいの経過で、苦しみながら例外無く死亡するのです。隣の人がそうやって死ぬのを見ると自分にも出ているのじゃないか一生懸命に体を調べている姿は哀れで見るに忍びませんでした。皮下出血が出てきたら、意識ははっきりしたまま、必ず高熱と出血で死んでいくのです。それで「助けて下さい」と言って捧まれるのです。助けて下さいと頼む人達を前にして、私達は何一つ治療の手立てを持たなかったのです。)

**質問者** 止血剤が回ってきたとき、実際そのお母さんが言ったのですか。

**濱** そう言いました。

**質問者** お母さんに最初に？

**濱** 差し上げました。けれどもみんな亡くなりました。

**質問者** 効かなかった場合は、また別の方法を取るのですか。

**濱** ええ。だけど何も効かなかった。病理解剖の小野先生という人が来られて、病理解剖をやらせ、私はそれを手伝いました。その結果分かったのですが、まず初めに赤痢のように血便を出して亡くなったと言ったでしょう。それは腸の上皮と……上皮細胞というのはしょっちゅう新しいのに生まれかわる。その生まれかわる母細胞が死んでしまっているのです。だから上皮が壊れてしまった。それからリンパ腺が全部壊れた。リンパ球も常に新しく生まれているのにその元の細胞が死んでしまっていた。だから出血していたのです。今度の場合も同じことで、血球と出血を止める血小板は骨髓でつくられるのに、その骨髓が放射線で壊されてどろどろになっていました。造血組織が無くなった人間は、どんな処置をしても治るはずがないのです。

**質問者** 最初は何らかの形で被爆していて、それが発症するというのはやはり期間があるのですか。

**濱** そのときの壊れ方によって、生き残った細胞が生き延びた時間の差によって起こってきたのだと思います。

**質問者** 大体数カ月くらいですか。

**濱** いや、いや、高い放射線障害を受けた人は1カ月半くらいで全部亡くなりました。DNAに小さな障害が出来た人はあとで白血病や癌などになる確率が有為に高いようです。

**質問者** 出てきちゃうわけですね。

**濱** 出てきて、みんな2週間足らずくらいの間にとまって全部亡くなってしまったのです。血小

板とかも全部壊れているから、筋肉の中なんかに出血がいっぱい起こっていましたよ。

**質問者** それでポツポツと赤い点が出てきて…。

**濱** まず出てきて、それから体の中でもどんどん出血をしている。それからさっき言ったように、上皮やなんかが壊れているから鼻血が出る。口から出る。下から出る。それが続いて、確実に亡くなっていくのです。

新興善で悲惨だったのは、山里の場合は、死体を運動場に出して焼く事が出来ましたが、新興善は町の中にありますからね、運動場で火葬するわけにはいかないのです。だから一度に亡くなった死体を全部体育館に置いてあったのです。それが全部腐り蛆がわきました。それだけでなく、10月に来た台風で、体育館の屋根が飛んでしまって、死体がみんな雨晒しになりました。そこでもまた…… 私は割と子供に好かれるんですね。私について回っていた子が死んで、その子が雨晒しになっていた哀れさは忘れることができません。

**質問者** じゃあ新興善の救護所では、ある時期突然一気にふえたのですか。

**濱** はい。一気にでした。私達が帰ったのは、その状況が一応おさまって、また後、その次の波が来たのだらうけど、一応状況がおさまった段階で帰ってきたのです。それが10月末でした。11月初めか、その時期でしたよ。

**質問者** 8月末に福岡に帰って、またすぐに戻って、実際2カ月近く新興善で救護をやったのですね。

**濱** はい。やりました。

**質問者** そのときの九大のメンバーは3人。

**濱** だけでした。時々九大から来られたけれど。

**質問者** たまに短期で。

**濱** ええ。来られましたね。さっき私達にお説教をした助教授もそういうことで来られた。

**質問者** 来て、その場でそういうことを言ったんですね。

**濱** ええ。

**質問者** 8月13日に西部軍の要請で九州帝国大学が長崎に入っていますね。

**濱** 13日？ 着いたのが。

**質問者** それから30日くらいにも、厚生省と九州総監部の委嘱による九大医学部が長崎に入っていますね。

**濱** なんかそういうのが調査に来られたんでしょう。

**質問者** 九大医学部のグループが幾つかあったのですか。濱先生が行ったグループ以外にも。

**濱** いや、それはなかった。今言われたような感じで来られたんじゃないかな。熊本医大も来ましたよ、確か。

(濱氏註：九大の救護班は第1班《医師4名・4年生21名・私達3年生2名の合計27名》が8月20日頃まで、第2班《40名》が8月末頃に約1週間派遣されています。第2班は新興善の私達と一部重なったかも知れませんが、記憶にありません。なお、熊本医大は記憶があります。)

**質問者** それは載っていないな。広島というのは随分あるのだけど。これは実は笹本さんという人の本(『米軍占領下の原爆調査』)がありましてね。そこに出てくる日にちの書いてある項目を全部時間の順序に並べたものを作ったのです。

**濱** 僕も正確じゃないのだけど、12日の朝だった気がしますね。11日に出かけて。

**質問者** それがこの13日に相当するのかな。

**濱** 多分そうですね。

(濱氏註：他の人の記憶も11日出発、12日到着が多いようです。)

**質問者** 西部軍の要請だったみたいですね。あと8月14日、呉鎮守府の調査団が長崎に入っているようですね。

**質問者** 軍の救護活動中に、アメリカではなくて、日本軍の関係者は何人か来りましたか？

**濱** それがね、新興善には海軍の川棚の人が来ていらしたらしいのですよ。だけど山里には看護兵だけしかいなかったですよ。

**質問者** 特に軍が状況を見に来るとか、そういったことはなかったのですか。

**濱** 長崎はやっぱり海軍の管轄だからかな。

**質問者** ああ、そういうこともあるのですね。

**濱** 佐世保がありますからね。陸軍関係はなかったような気がします。

**質問者** 海軍は看護兵のような誰か来ましたか。新興善のときですが。

**濱** 新興善は、今言った軍医さんが2人いらした。それは川棚から来られたのです。

**質問者** 山里時代は。

**濱** いなかったですよ。看護兵がおられたけど、それほどこの看護兵か憶えてないですね。

**質問者** わからないとうことですね。では、実際 10 月に帰ってきて、復学というか、また医学部に戻られるのですね。これはもう通常の講義になるのですか。

**濱** それからは普通の講義が始まりました。

(後略)

(終了)